



波の神を祀る人びと

よしもとやすこ
吉本 康子
民博 外来研究員

アジアの縮図のような町

ベトナム中南部、荒涼としたサボテンの林と赤褐色の砂丘に囲まれたファンランの町のはずれに、丘の上に建つ煉瓦造りの塔がある。一七世紀にこの地域一帯を統治していたチャンパ（二世紀〜一九世紀）の王を祀るこの塔には、王の上半身が模られたリング、妻たちの彫像などが祀られている。塔の入口は南シナ海に面しており、王が海を眺めているようにもみえる。わたしが最初にこの塔を訪れたとき、「王の妻の頭部は一時盗まれてなかったのだが、最近もどってきたんだよ」とチャンパ人の管理人から聞かされた。ベトナムで「バラモン教」とよばれる、ヒンドゥー教の要素と民間信仰が融合した独特の宗教を信仰しているという彼は、この地域にはさまざまな宗教を信仰する人たちがいて、この王の信仰に反対する人びともいるのだ、とつけ加えた。確かに、ファンランの町とその周辺には、ベトナム人が管理する仏教の寺、カトリック教会、民間信仰の神を祀る祠、華人の閩帝廟、チャム人イスラーム教徒のモスクなど、さまざまな宗教施設がみられる。まるで多様な



塔が建つ丘の上から眺めたファンランの町

宗教が混在するアジアの縮図のような町である。管理人の話聞きながら、宗教や風習をめぐってここでのどのような交渉があったのだろうか、とわたしは考えていた。それから機会があるごとにこの地域を訪問し、先住民であるチャムの人びとの生活や地域の歴史を調べている。

に投げ出された。イルカに飲み込まれたエツワリの魂はクジラとなり、水害にあう漁民を救うようになった、という。津波によって亡くなったチャム人エツワリは、「ポー・リヤツ」、すなわち「波の神」とよばれて、「バラモン教」、そして、イスラームを受容した「バニ教」チャム人信徒に、現在も信仰されている。

波の神を祀る

波の神の話は、チャム人が海と密接にかかわって生きてきたことを示す伝承である。わたしが訪問した村の人びとも、ときおり供物を捧げに、波の神の聖地に行くらしい。以前、この村で調査をしていたときには、「ポー・リヤツの夢を見た」と言いだした女性の呼びかけで、数十人の村人が祠堂に行くことになった。彼らと同じ馬車に乗せてもらい、わたしはその様子を見学することができた。祠堂がある場所は、現在はベトナム人の漁村になっており、祠堂そのものは、ベトナムの王を祀る宗教施設になって



波の神の祠がある漁村

いた。穏やかな海にお椀型の船がぶかぶかと浮かぶ、ベトナムではよく目にする港の光景が目の前にあった。祠堂の裏庭には、津波に巻き込まれて水死したとされる「一名の「ジャワ人」を埋葬した土饅頭が、漆喰で塗り固められた状態であった。はっきりとした年代や目的は不明だが、チャンパ時代にジャワから来た人びとである。馬車を降り、供物を持ち運ぶと、村の人びとはそこで「クルアーン」の誦誦や供物の献上をおこなった。そして、「ポー・リヤツが祀られている」とされる「前賢」と書かれた祭壇の前では、女性たちが踊りを献上した。ファンランやファンリーの海岸沿いには、波の神を祀る聖地がいくつもあるとされる。しかしその多くは、ベトナム人の居住地になっていた



供物載せて漁村を歩くチャムの女性たち



「ポー・リヤツ」を祀るとされる祭壇。中央の「前賢」は「過去の賢人」などを意味するが、ここでは先住民の神、すなわち「ポー・リヤツ」を指しているのであろう。かつて中国の支配を受け、儒教の影響を受けたベトナムの宗教施設には、このように漢字とそれを応用したチュノムで飾られた碑文や位牌などがみられる

り、荒地になっていたりするらしい。チャンパの崩壊とともに、チャム人は海から離れた内陸に居住せざるをえなくなったからであろう。とは言え人びとは、聖地から離れて暮らすようになっても、伝承に記憶される津波の犠牲者を鎮魂し、波の神に祈りを捧げてきたようだ。ところで、ファンランの海岸沿いには、原発の建設予定地になっている場所がある。「世界最高水準の安全性を有するものを提供する」として日本はこれを支援しようとしているのだが、「ポー・リヤツ」の伝承を有し、現在も鎮魂の祈りを捧げているような地域に、本当にそんなことが可能なのだろうか。遠く離れた国の伝承を聞きながら、いまだ収束していない日本の原発事故の問題が頭を過った。

鯨になった青年の話

ファンラン周辺に暮らすチャム人の多くは水稲耕作で生計を立てている。とはいえ、彼らの祖先はインド文明の影響を受けた国家チャンパを現在のベトナム中部に築き、海上交易に従事していた人びとだ。交易を通じてアラブや中国の商人らとも接触していたので、海からさまざまな文化を受容したに違いない。

二〇一一年の夏の調査では、ファンランから六〇キロほど南下したファンリーという町の近くにあるチャム人の村を訪問した。この地域のチャム人と海域世界、とりわけ、イスラームとの歴史的な関係を知るために古い文書や伝承を探し、古老に聞き取りをするための訪問である。こうして集めた伝承のひとつに、「アラブ」に向かい、ある師の弟子となったエツワリという青年の、次のような話がある。エツワリは、修行の途中で故郷に戻ること申し出たが、師は強く反対した。しかしエツワリは師に隠れて舟を作り、反対を押し切って旅立った。すると、師がかけた呪いのことばのとおり、エツワリは故郷の浜辺沖で津波に遭遇し、舟が大破して海